
空より明るく

GYU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空より明るく

【NZマーク】

N0179D

【作者名】

GYU

【あらすじ】

彼女は明るく、いつも男と一緒にいたたそして一人は恋に落ちてい

く

(前書き)

なんにせよ恋愛ものは初めてでして・・・
文も下手なので我慢してみてやってください。
名前は出しません。

読みにくくと思つますがどうぞ感想もお願いします。

2学期、運動会、文化祭、マラソン大会の三大行事を終えた僕には、受験勉強という辛い現実が待っていた。勉強はできるほうで運動もそこそこできる、そんなスキルにあまり恵まれない僕は鬱で死にそうだ。

「何自殺しそうな顔でいるのよ。ちゃんと勉強教えてあげてるのに。

「何なら自殺してあげようか？ロープある？」

「剃刀だつたらあるけど……」

「何か本気っぽいからやめた。」

こんな会話をしている15歳思春期の男女が外から見たらうらやましいと思われるだろう。この前冷やかされたが双方全然気にしてなかつた。

この歳になつてチコと真顔で言える女子に恋愛感情を抱けるのかと、そんな事ばっか考えている。ただの幼馴染で部活の仲間みたいな存在だった彼女はどちらかと言うと男友達みたいな感覚である。でも彼女は他の人より美人で、性格もおおらか、スポーツ・勉学共に学年最強といった感じのパーフェクト超人。恋してみたいができるない、そんな感覚が続く毎日。

「ねえちょっと

「顔が近い、もつと離れる

「何だ？」

「やつぱりなんでもない

「? ? ? ?

意味不明な言葉だ。そうしていたら何か上から降ってきた。消しゴムのようだ。

彼女と話していたら大体男子限定の落下物が落ちてくる。ちよつとなってきた自分がすごい。

この前親友（？）とも言われる存在に蹴りを入れられたのはショックだつたが。

落下物を避けながら彼女に勉強を教えてもらつていたがチャイムが鳴つた。

「ありがとな。じゃあ部活でな。」

軽い礼を言つた。落下物が落ちてこなくなつた。

「バイバイ」

かなり上機嫌な様子で出て行つた。クラスが違うからだ。そして6限目が始まつた、と思ったが自習になつていて。親友に誘われて持つてきたゲームで通信プレイをやつた。4人で協力プレイができるゲームを3人でやつていると、

「おい、男よ。」

突然、親友が話しかけてきた。

「何だ？あつ、ちょっと回復薬くれない？」

「しようがねえな。・・・じゃなくて」

本題に移つた模様。

「お前、彼女さんのこと好きなの？」

「ぶえ！？」

いきなりすぎたので吹いた。

「図星のようですね。男君。」

親友の古い付き合いのAが言つた。

「ちがうよ。あいつに恋愛感情なんか抱いてない。それにあいつだつて・・・」

「鈍いな。彼女さんはお前に好意を持っているのがまだ氣づかんのか。」

女縁がないお前に言われたかないよ、と言い返した。

「ただの幼馴染なだけだよ。」

俺はきつぱりといつた。なぜか胸が少し痛んだ。

好きじゃないんだ。と自分に言い聞かしてゐみたいなもんだつた。

「あ～もう！にぶいなあ！」

すると親友が立ち上がつて

「彼さんはお前が好きなんだよ！」
と大声で叫んだ。クラスが静まつた。

そして不幸なことに、

「えつ・・・・・」

彼女が教室のドアを開けていた。完全なる死亡フラグだ。

「・・・・・・・・・」

彼女が教室から飛び出した。

そして殺氣がした。男子だ。いやハンターだ。

なぜか俺に落下物が降つてきた。だが慣れたせいか全部避けた。

「あゝあ、泣いてたかもよ？」

「だれのせいだ」

親友の耳を引張つた。

「おい！彼女違うよ！これはこいつが・・・・

彼女は走り去つて行つた。

「とりあえず追いかけたほうがいいのでは。」

「ああ、そうする！」

親友の耳空手を放して、教室を出て行つた。

大体いるところは見当がついている。屋上だ。

あそこは僕と彼女が入学して初めて行つた所だ。

今でもそこで2人弁当を食べている。彼女が落ち込んだときは必ず屋上へ行くから大体の行動パターンは読めているのだ。

駆け足で階段を上つた。そして屋上に着いた。

ドアを開けると案の定彼女がいた。柵から町並みを見ていた。

「彼女。」

そう呼んだら彼女が「えつ？」とこちらを向いてきた。

「さつきは「ごめん。親友が変なこと言つて。」

彼女がクスッと笑いながら言つた。

「ううん、全然気にしてないよ。それよりさ・・・・男。」

彼女が微笑みながら言つた。

「私の事、好き？」

心臓に金鎰で叩かれたような衝動が起きた。

彼女は真剣な眼でこちらを見ている。長い沈黙が続く中僕は、答えを見つけた。

「好きだよ。」

「えつ・・・」

僕は答えを言った。

「わかつたんだ俺・・・お前のことが好きだつたんだつて。」

彼女が答える前に僕が言った。

「いつも君の事ばかり考えてたかも知れな。俺・・・。」

「でも怖かつたんだと思つ。君に恋することが、君を好きになることが。」

僕は言い続けた。

「昔から君の事ばかり考えてた。遊ぶとき、勉強をするとき、昔からきみと一緒にいた。友達に冷やかされた事だって何回もあった。

でも別れなかつた。何でだと思つ?」

彼女が答えた。

「好き・・だつたから?」

「そりなんだ、昔から君の事ばかり考えてた。風邪で休んだときも君は僕の家にお見舞いに来てくれた。そんな君に僕は引かれていつたんだ。でも僕は好きだと言えなかつた。怖かつたからなんだ。君に返事を返されるのが怖かつた。もしかしたら振られるかもしれない、そんな思想しか浮かばなかつた。」

僕はその後本心をすべてさらけ出した。

「そして僕は君への恋愛感情を自分で封じ込めてしまったんだ。そして今まで友達という関係に収めていたんだ。でも今君に言われて思い出したよ。本当は好きだつたんだ。誰よりも、君のことが好きだつたんだ。」

「僕は君が好きだ。大好きだ。他の誰よりも君を愛する気持ちはあるんだ。」

「付き合ってくれ、彼女。」

彼女が顔を上げた。

「私は別に好きじゃなかつたよ。」

あまりにも酷過ぎる返事だった。だが話は続けていた。

「でも今やつと氣づいた！大好きだつて！」

「えつ・・・

「世界中の誰よりも、男の事が、

大好きだよ。」

僕は思わず涙が出てきた。泣いているんだ。久しぶりだ、泣くのは。彼女が近づいてきた。彼女も泣いている。

僕は彼女を抱きしめた。彼女は微笑んで言った。

「苦しいよ・・・男。」

「もう少しこのままでいてくれないか？」「

彼女はほんのりとした声で

「いいよお。」

と言つた。

「男の腕、あつたかくて気持ちいいやあ。」

「君だつてあつたかいし、かわいいよ。」

「へへえ ありがと」

出会つたのははつきり覚えてないが、幼稚園のころから一緒にいた。

小学生になつたらお互いサッカーをやつていた。

中学生では、サッカーの試合でシユートを決めたとき人一倍喜んでくれた。

そして今、僕たちは抱き合つてゐる。恋人同士として。

僕たちは結ばれたんだ。もう恋人なんだ。

実感がわかないが彼女を抱きしめたときの温もりが確かにある。もう一生離したくなかった。僕の腕の中で彼女は言った。

「ずっと一緒にいようね。」

「ああ、分かつてゐるよ。絶対離れないから。」

そういう会話をしていたらチャイムが鳴つた。

「じゃあもうひとつか。」

「手。」

「え？」

「手！」

そう言つて彼女に手をつかまれた。

「これでずっと一緒に」

「恥ずかしいなあ。」

「いいじやん！いこお！」

そうして僕たちは屋上を後にした。

屋上での彼女は天使のようで、ひとつの大太陽だった。

僕たちは恋をしていつた。

苦しい事もあるかもしれない。

でもそんな時、彼女さえいれば何でもできるような気がする。

そのときの彼女はきっと

空よりも明るいだろう

(後書き)

どうでしたか？感想お待ちしております。
好評でしたら次回作も恋愛といつ事似としていただきまます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0179d/>

空より明るく

2011年1月25日06時48分発行